

淡路島のナガサキアゲハ

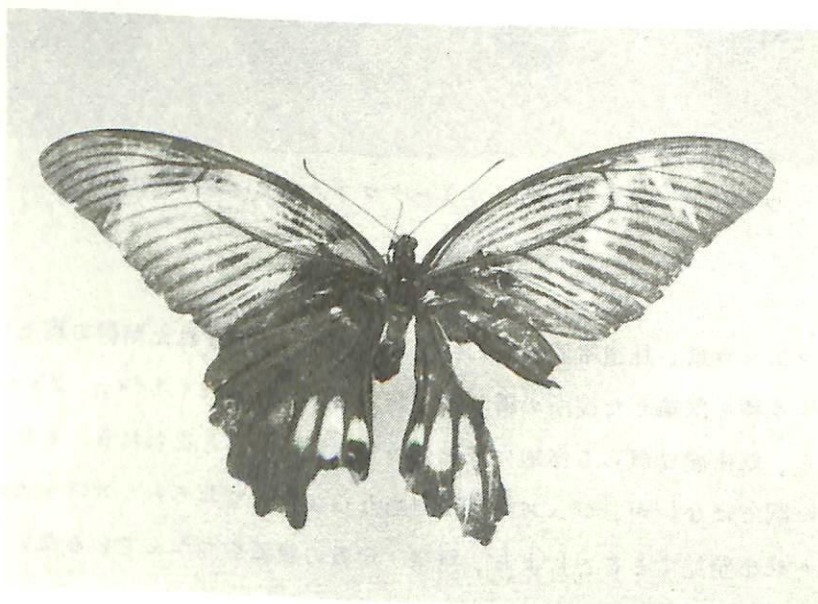
堀 田 久

淡路島の蝶を語るとき、ナガサキアゲハを忘れてはならないだろう。淡路島で採集されたものが兵庫県下の初記録となったばかりでなく、本種が確実に土着しているのは県下で淡路島だけである。

兵庫県下のナガサキアゲハについては、1966年に山本広一氏が「兵庫生物」に詳しく報じられた。また、1971年には神戸新聞の兵庫探検「自然編」で、淡路島のナガサキアゲハが大きく取りあげられ、筆者もその取材に協力したが、ここでは、本種の発見のいきさつや、淡路島における最近の状況について報告しておきたい。

1. 発見のいきさつ

この蝶は1951年8月、津名町志筑明神のミカン畑で、志筑小学校4年生の畠中弘君によって採集された。当時筆者は志筑中学校（現在の津名中学校）に勤務していたので、その年の9月に隣にある志筑小学校へ夏休みの作品展を見に行き、ナガサキアゲハを目に止めたのである。粗末な空箱に入れられた蝶は、白斑も鮮かな雌であったが、右後翅はかなり破損していた。四国か九州あたりで採集したものだろうと思ったが、念のために確かめることにした。さいわい筆者が担任していた学級に採集者の姉がいたので尋ねてみたところ、間違いなく志筑のミカン畑で捕えたものであり、しかも2頭採集して1頭は捨てたとのことであった。



兵庫県下で最初に採集されたナガサキアゲハ（♀）

淡路島ではそれまでナガサキアゲハを見かけたこともなかったので、珍しいものと思い、北隆館発行の月刊誌「新昆虫」のムシペン欄に発表しておいた。後になって、これが兵庫県下における初記録であったことを知り、筆者自身驚ろいたのである。

なお、この蝶は畠中君からもらい受けて、今も当時の姿のまま大切に保管している。

2. 土着と分布状況

筆者自身が淡路島でナガサキアゲハを採集したのは、それから7年後の1958年7月27日のことで、洲本市安乎町のミカン畑で産卵のために飛来した雌を捕えた。その後は津名郡の大町・塩田・塚・下塚、洲本市の下加茂・物部・大野・由良・上灘・中川原・先山・三熊山・曲田山、三原郡の広田・阿万・福良・灘・諭鶴羽山・諭鶴羽ダムなどで確認され、その数も多くなっている。筆者がこれまで勤務していた由良中学校や青雲中学校などでは、時おり教室へ迷い込んでくることがあった。なお由良では春型もかなり多く見られた。

本種は、最初四国の徳島あたりから淡路島に飛来し、夏の間だけ繁殖していたのが、1960年代になって土着するようになったと考えられる。それも由良・灘など淡路の南部地方では確実に土着しているが、洲本市安乎町では本種の見られる年と全く見られない年とがあり、まだ土着はしていない。

なお、今年も島内のあちこちで本種をよく見かけるが、安乎町北谷においても極めて多く、オニユリの花に好んで飛来し、ナルトミカンやナツミカンの葉に盛んに産卵している。

3. 雌の白斑の変異について

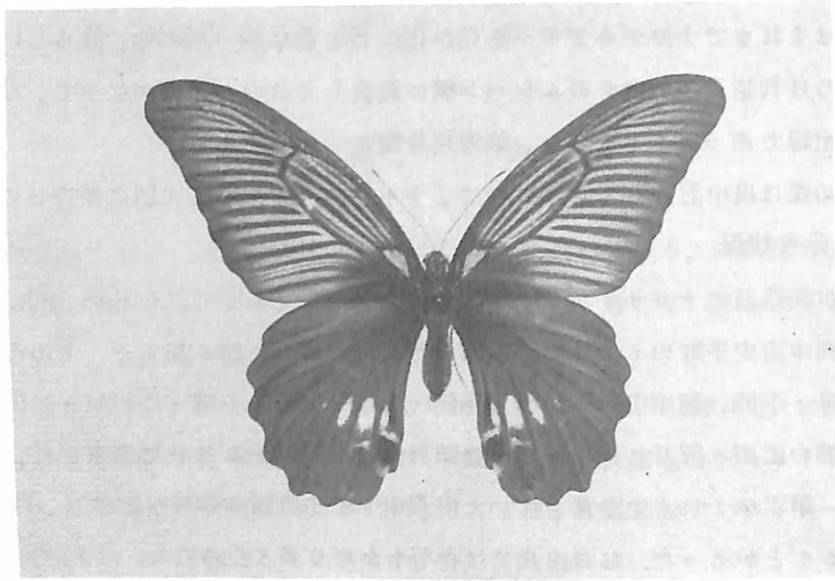
本種の雌の後翅の白斑は地域によって大きく差があり、一般に南下するほど大きくなることが知られている。筆者の観察では淡路島のものは他地域に比べて白斑が小さく、飼育したものは野外のものよりさらに小さくなる傾向が見られる。

この白斑は同じ地域のものでかなり変異があり、いちがいに地域差を論じることは出来ないが、参考までに手元にある標本に基いて、淡路島産と他地域産のものを比較してみた。

屋久島産……1室から6室まで白斑が明瞭に認められる。

福岡産……1室から4室まで白斑が明瞭、5室はかすかに認められる。

淡路島産……1室から3室まで白斑が明瞭、4室はかすかに認められる。



淡路島産のナガサキアゲハ（♀）

4. 飼育記録

次に洲本市安乎町における本種の飼育記録をあげておくが、これは成長の最も早かった個体の記録である。

1978年7月20日、洲本市安乎町でオニユリの花に飛来した雌を捕え、ナルトミカンの枝にかぶせた網袋の中に放す。

1978年7月21日 産卵

7月26日 孵化（1令幼虫）

7月29日 1眠起（2令幼虫）

7月31日 2眠起（3令幼虫）

8月4日 3眠起（4令幼虫）

8月7日 4眠起（5令幼虫）

8月13日 前蛹

8月26日 羽化（雌）

なお幼虫も網袋の中で飼育したが、産卵から羽化までの日数は、最も成長の速かった個体で36日であり、最も成長の遅かった個体で40日であった。